想い出すままに

高校９期　(1957 年卒)　初代部長　福家（旧姓：菊井）清美

存在すら知らなかったハンドボールに、高津でどっぷりと慣れ親しんで過ごした時から、実はボールに触れていないのです。当時運動場にはコートが一面しかありませんから、私たちが練習していると野球部の打った球が飛んできたり、サッカーの人たちと同じゴールを使ったりしていました。しかしあまりにも広く大きなコートに、これがホンマにドイツで女子のために生まれたスポーツなんかしらと思ったりしていました。

この年になると、てくてくウォーキングがふさわしく、もうハンドボールができる年ではなくなりました。後輩のＯＧの人たちが現役の人たちに混ざって元気に生き生きとプレイなさる姿が羨ましくて眩しくてたまりません。

あのころは、まだユニフォームのないテンデバラバラの体操服を着た出来立てほやほやの赤ちゃんチームは、さや先生と先輩たちの前で一人ひとりシュートをしてポジションが決められていきました。当時、キーパーをしなさいといわれた私は、ドッチボールの延長みたいに考えて、男子のようにウサギのように飛び跳ねて回転レシーブもどきの砂場の練習はあきらめて、ポトンと手前にボールを落とす練習ばかりしていました。卒業するころに７人制の屋内ルールが生まれて、初めての練習であまりに早いジャンプシュートに面喰って、くらいついていくのが精いっぱいでした。だから試合前には、対戦相手のシュートする姿を良く見ていました。

全戦全敗のままで卒業するのかなあと思っていた矢先の初めての室内大会で、ドローの末にジャンケンで勝ちあがったりして、むかえた府下でも強豪の対梅花高校準決勝戦では、なぜか下見をしていた相手方のシュートの癖がコトゴトク的中して勝ったときには、運がいいなあーと思ったものです。周りよりも本人たちがそして対戦相手も驚いている様子にすまなく思ったほどです。さや先生はご褒美に“ミマツ”という心斎橋の喫茶店で、アンミツをチーム全員にふるまってくださったのが甘くて美味しかったこと。

勉強を兼ねて、男子の試合もよく応援に行きました。練習といえば、さや先生の指導というよりも、今は亡き山中先輩や津田、榎本各先輩が毎日指導に当たってくれました、その恩も忘れて「本当に大学生してはるのかしら」と囁いたりしたものでした。さや先生からは「敵は本能寺にあり」と言われたので、意味も解らずシュンとしたものですが、煙すら立たなかったのは不徳のせいなのでしょうか?

大学に進学してから、日本のハンドボール界で大活躍された 10 期の中江さんについて、さや先生はいつも、「試合になれば正選手で出て大活躍するのが分かっているから、あまり熱心に練習しない。それが口惜しい」と言っておられたのが耳に残っています。先生の目には、中江さんが本腰を入れればインターハイも夢でないのが見えて

おられたのでしょう。部誌復刻版を読んでご本人の中江さんご自身も「高津時代にもっと練習に打ち込んでいたら、お遊び練習でなかったら、インターハイを成し遂げていたと思う」と述懐しておられるのを読んで、節々にこのような冊子を出していただいているからこそ、知りえることがあるのだと、また後輩たちに身をもって伝える言葉があるのだと思いました。

今は亡き人たちが、そしてここに投稿する人たちが、あの時代にはこのような思いでおられたのだと、いたく懐かしみ感慨に耽るよすがを頂いているように思います。それにしても、３階の窓から絵筆を振りかざしながら、大きな声を飛ばして叱咤激励されていた額田先輩の声が今でも耳に響いております。

しっかりとした現役の部員さんがいて、その人たちを支える熱心な方々が歴代何人もおられて伝統が紡がれていきます。そのまっただ中を歩ませて頂いている幸せを今感じています。このような激しいスポーツがもう現役では叶わない年令だけに、贔屓するスポーツがあるということは、ワクワクしてまるで青春が戻ったかのようです。女子サッカーだって私たちのころはなかったのですもの。いつかハンドボールが、メジャーになってプロチームが出来ないとも限りません、オリンピックで活躍する大きな夢を持ち続けているのですよ。